

# 葬礼競技その他 (1)

井 本 英 一\*

東南アジアでは、葬儀に際して、ボクシングをする習慣が伝承されている。新聞報道によると、ミャンマーでは、ある高僧の7か月忌に際して、イラワジ川の河原に安置された、高僧のミイラが入ったガラスケースの前で、ビルマ式ボクシングの小屋がかけられた。ボクシングは、東南アジアに共通するやり方で、殴り、蹴り、投げ、頭突きなどの技を用いて、倒れるまで闘う。寺の行事であるが、小屋では入場料をとり、勝者には、公務員の月給の2倍近い賞金が出る。高僧のミイラには、人々は列をなして手を合わせる（『毎日新聞』'95・4・15）。

ミャンマーの葬儀では、このほか、綱引きが行われた。高僧の遺体を安置した車の前と後に、長い綱が結び付けられる。近隣の健康な男子が集まり、あたかも命がけでやるかのように、互いに綱を引き合う。綱引きは、数時間、さらには数日つづくことがある（G. J. フレイザー『スケイプゴート』ロンドン、1914年、174—175頁）。この綱引きの一方は、悪魔の勢力を表わすとされる。したがって、もう一方の善霊の勢力が勝つように、前もって調整しておくようである。そこで柩車は、結局は、火葬場に向かうことになる。同じ綱引きは、インド東南のチッタゴンに居住するチェクマ族の間でも見られる。彼らの祭司の葬儀でも、その遺体を載せた柩車の前後には綱が結びつけられ、善軍と悪軍を代表する若者によって綱引きが行われる。もちろん、善

---

\* 本学文学部

キーワード：葬儀と闘技、歌競べ、綱引きと竜戦、競馬とペーロン競争、競技の賞品

軍が勝つように調整してある（フレイザー，前掲書）。

タイの例をあげておく。ラーマ8世（1925—1946）が亡くなったとき，その遺体は，王城前広場に設けられた須弥山に安置された。須弥山は，広場の半分を占める天幕によってつくられ，内部には，王の遺体を火葬にする黄金の須弥山が設けられ，その前には，国王の臨席台，ボクシング場，娯楽遊戯場，法事のための施設などが，全て揃っていた（ラクリット・プラーモート著・吉川利治訳「タイの王権とインド文化」『世界口承文芸研究』第5号，東洋編，大阪外国語大学口承文芸研究会，1984年，84—85頁）。国王の遺体が茶毘に付される前，ミャンマーのボクシングと同じようなタイ式ボクシングが行われた。遊戯施設も単なる娯楽のためではなく，勝ち負けを争う遊戯のための施設であったと考えられる。東南アジアのボクシングは，まだ神事用の競技の面影を残していて，試合前の，音楽に合わせて選手が行う礼拝の中に，それを見ることができる。

かつてのタイ国の属州であったラオスでは，首長や高官の遺体が火葬されたとき，ボクサーが互いに打ち合った。祭りは3日つづいたが，火葬の火が燃えさかっているとき，ボクサーは，もっともはげしく打ち合った（G. J. フレイザー『死にゆく神』ロンドン，1911年，97頁）。フレイザーは，同じ個所で，南太平洋のフトゥナ島では，死者が出ると，友人らは顔，胸，腕を貝殻で傷つけ，そのあと行われる葬式では，二人のボクサーが死者に敬意を払って，互いに傷つけ合うと述べている。死者の前で，生死を賭けて競技をするのは，死者に献じる人身御供を選定するためであったと思う。競技に負けた敗者の血は，死者にとってはそれほど有難いものではないかも知れない。しかし，競技に敗れた者は，弱者ではなく，選ばれた者であった。カール・B・レーダー著・西村克彦，保倉和彦共訳『死刑物語』（原書房，1982年）はいう。エトルスク人は，知名人の墓標の上でボクシングを行った。殴り倒されたボクサーの血が，てんかんの特効薬とされたことから見て，墓上に流された彼の血は，死者の復活の薬となったことが考えられる。この迷信は，のちには，斬首によって処刑された者の血に引きつがれた。これらの犠牲は，

人身御供の変形である (48頁)。墓標は路上の敷き石のように、地面と同じ平面をなして敷いてあったので、その上で競技ができた。敗者は、神によって選定された犠牲であり、処刑者も、神への供物とされる犠牲であった。神や死者の賦活には、彼らの血が必要であった。ローマの將軍スルラは妻の死後数か月後に、格闘士の競技を催した。観覧席には、男も女も混っていたが、1人の美しい女が座っていた。女はワレリアといい、少し前に夫と別れたばかりだった。女はスルラの後ろを通るとき、彼の外套から毛糸の端をむしりとり、自分の席に戻っていった。スルラは、彼女に魅惑され、彼女に結婚を同意させた (『プルターク英雄伝』「スルラ」35, 河野与一訳, 岩波文庫, 1954年)。ローマでは、再婚する男はこのような手順に従って、再婚したのかも知れない。

ヘロドトスはいう。トラキア人の金持ちが死ぬと、遺体を3日間安置しておき、哀哭の儀礼のあと、犠牲獣を屠って宴会を催す。それから、遺体を火葬あるいは土葬にして葬り、塚を築いたのち、あらゆる種類の競技を催す (『歴史』5・8)。トラキア人の葬儀では、一方では人間の競技で敗者を決定し、一方では人身御供に代わる犠牲獣が殺される。別の個所で、ヘロドトスはいう。イオニアのボカイア人は、ペルシア軍に逐われて、キュルノスに移住したが、近隣の住民に対し、掠奪を働いたので、エトルリア人とカルタゴ人の軍船に攻められ、海戦となったが、敗れて捕虜になった。彼らは、エトルリアのアギュッラ人によって町の外にひき出されて、石打ちの刑で処刑された。その後、ボカイア人が処刑されて埋められた場所を通った者は、家畜・駄獣・人間の別を問わず、手足が曲がったりした。アギュッラ人は、罪を償いたいと考え、殺されたボカイア人のために盛大な祭りを催し、体育と騎馬の競技を行った (1・163—167)。体育の競技には、レスリングなどがあったことは明らかである。ここでは、ボカイア人の怨霊のたたりを宥める意味で競技をしている。

インドの哲人カラノスは、病いが革まると、馬で薪の山の所まで自らを運ばせ、薪の山に登りながら、マケドニア人に挨拶し、大王には近いうちにバ

ビロンでお目に掛かりましょうといい、焚死した。アレクサンダー大王は、火葬から帰って多くの友人や将軍を招いて、葡萄酒を飲む競技を催し、1タラントンの値打ちのある冠を賞品に出した。プロマコスが優勝し、冠を手に入れたが、3日間生きていた。その他、41人の者が悪酔いして死んだという（『プルターク英雄伝』「アレクサンドロス」69—70）。ここでは、競技はレスリングやボクシングではなく、葡萄酒の飲み競べである。1人の敗者が死ぬというのではなく、勝者をはじめとして、多くの者が酔って死んでいる。カラノスは、アレクサンダー大王が、バビロンで病死することを予知していた。

アレクサンダー大王は、ペルシア遠征を決めると、ヘレスポントを渡り、トロヤを訪れた。ここで、大王はアキレウスの墓標に油を塗り、慣例に従って、自らも裸になって仲間の人々と競走してから、そこに花輪を懸けた（前掲書「アレクサンドロス」15）。墓前で競走した場合、敗者はどうなったのであろうか。敗者は、後述するアタランテーの求婚者のように殺されるのが慣わしであった。アレクサンダーの場合は、他の供物によっていけにえに代えたのであろう。フレイザーによると、王権の交替も、競走によるものがあつた。古代の王は、年末になって、3日ないし5日、王宮を去って郊外に逃走し、王宮では仮の王が、政務を担当した。この期間が終わり、年が改まると、王は急遽王宮に帰り、仮の王を殺して王位に即いた。このときに、何らかの形の競走が行われたようである。仮の王は、1年前から、片目にされ、片足の筋を切断され、片手も萎えていたかも知れないので、競走には勝てる道理はなかった。ギリシア神話では、アタランテーは求婚者と競走し、自分は武装して走った。負けた求婚者は殺される運命にあつた。メラニオンは、術策を弄して彼女をだまし、結婚に成功した（アポドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、1953年、143—144頁）。

ヘシオドスは、エウボイア島のアンピダマス王の葬儀に参加するため、生涯に一度、広漠たる海を渡って、アウリスからエウボイアのカルキスに至った。彼はそのときの祭礼競技の歌競べに勝ち、把手のある三脚釜を手に入れ

た。彼はその釜を、詩歌の神であるムーサーらの廟に奉納した（ヘーシオドス『仕事と日』松平千秋訳、岩波文庫、1986年、86頁）。ヘーシオドスが、賞として手に入れた三脚釜とは、鼎のことで、それは祭りに用いられ、墓室の中に副葬されたり、境界にあたる辺鄙な場所に安置された。ムーサーの祠堂は、本来は後者のような場所にあったが、祈願者は、祠堂に詣って神人共食を行った。歌競べの勝者は、死せる王と共食し、王を再生させるばかりか、自分自身をも再生させたのであった。

主よ、彼らに永遠の休らぎを与えよ、と歌うミサ曲レクイエムは、死者の魂が遊離しないように、死者に対して歌う魂鎮めの歌である。1人の僧が鎮魂曲を歌ったのではなく、多くの僧が同じ歌を歌ったり、別々の僧が順々に別の歌を歌い継いでいった。恐らく、仏教の声明や読経と同じように、個人によって優劣の差があったのであろう。葬儀における鬭争儀礼の伝統があれば、歌競べも行われたであろうが、死者の前で鎮魂歌の優劣を競うのがはばかられる段階では、皆が衷心、鎮魂歌を歌うだけであった。中世ドイツの英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の主人公ジーフリトは、ニーベルンゲンの宝を守る竜の血を浴びて不死身となったが、妃クリエムヒルトの兄グンテル王の重臣ハゲネの奸計によって殺される。ジーフリトの遺体は棺に納められ、僧らが3日間、ミサを歌いつづけた。ミサを歌いえた僧侶は、非常な苦しみを味わったので、彼らには、おびただしい布施が贈られた。そこで、きわめて貧しい者も、裕福な身となった（『ニーベルンゲンの歌』前編、相良守峯訳、岩波文庫、1955年、第16歌章—第17歌章）。ジーフリトの遺骸の前では、あまたの僧がミサを歌ったが、3日間歌いえた僧がいわば歌競べの勝者で、彼は褒賞を手に入れて豊かになったのであろう。

欧州の挽歌であるミサ曲は、東洋の挽歌である薤露<sup>かいろう</sup>と蒿里<sup>こうり</sup>に当たる。薤露とは、ラッキョウの葉に置いた露のことで、命のはかなさに喩えられ、王侯、貴人の挽歌の意とされた。蒿里は、下級官吏や庶民の挽歌とされた。蒿はヨモギを意味し、蒿里とは墓地のことである。ラッキョウやヨモギは、とるに足りない、はかない命に関係づけられるが、本来は別の意味をもっていたか

も知れない。プルタークによると、古代ギリシアのイストミア競技祭の勝者の冠は、古くはパセリでつくった。パセリはまた、葬式に使う草でもあり、死にかかっている人のことを、そろそろパセリを欲しがっているといった（『プルターク『倫理論集』の話』河野与一訳、岩波書店、1964年、222—223頁）。パセリは、競技祭の勝者の冠に用いた。勝者は半神半人の扱いを受けたので、彼を人間に戻すために、死者を再生させるパセリを用いたと考えられる。中務哲郎『物語の海へ』（岩波書店、1991年）によると、古代ギリシアでは、新生児をすぐセロリを敷いた寝床に置いた。また、古くはイストミア競技祭やネメア競技祭の優勝者の冠とされ、また墓所にも手向けられた（163頁）。新生児が無事再生するために、セロリの床に寝せられたことが分かる。墓にセロリを供えるのは、墓中の死者が、あの世で再生することを願った呪術であった。イストミア競技やネメア競技で行われた5種の競技には、歌競べは入ってなかったが、競技としてではない挽歌、悲歌は、死者に向かって歌われたであろう。古代中国の薤（ラッキョウ）や蒿（ヨモギ）は、もっぱら死者儀礼に用いられ、それが挽歌の意に転じたのではなかろうか。ラッキョウもヨモギも、その臭気によって、悪霊や邪視を防ぐ力をもつ。この点では、パセリやセロリと同じである。つまり、ラッキョウ（の葉）やヨモギは、死体の防臭剤として添えられた可能性がある。それも、身分差があったことは、前述したとおりである。

中国の唐の都長安には、東市と西市の2つの市場があり、各市に凶肆があった。凶肆というのは、今日の葬儀社のことで、葬儀一切を請け負った。石田幹之助『増訂 長安の春』（榎一雄解説、平凡社、1967年）の闘歌の論文は、この間の事情にくわしい。『李娃伝』にいう。鄭氏の子がかつて科挙に応じようとして長安にあったが、ある日、遊郭で妓李娃を見て、その容色に迷い、遊興に耽った結果、金を使い果たした。鄭生は、娃の母のために娃と隔てられ、窮巷に落魄の生を送ることになった。鄭生の失恋の病いが篤く、再起不能と見た下宿の主人は、彼を東市の凶肆の雑役夫として送り込んだ。鄭生は葬儀で哀歌を歌うのを聞くうちに、自分も上達し、長安中で、彼の右に出る

ものがないくらいになった。西市の凶肆は、鄭生のいる凶肆を破ろうとして歌手を導き入れ、両肆の歌競べが始まった (126—128頁)。ここにいう歌競べは、死者に捧げる挽歌の歌競べではないので、本来のものが発展した形と考えられる。別の可能性もある。本来は、葬儀においては、薤露と蒿里の二つの挽歌が歌われ、歌競べが行われたが、身分化が進行して、伝えられるような形に定着したのではないか。したがって、薤露行と蒿里行は、身分化する前は、歌競べの勝者の葬送であったかも知れない。

スパルタのアゴラから西の方角に、プラシダスの慰霊墓があった。墓から少し離れた所に白大理石造りの劇場があり、劇場の正面に、プラタイアの戦いで指揮をとったパウサニアスの墓と、レオニダス王の墓があった。人々は毎年、二人のために弁論を行い、競技会も開いた。競技には、スパルタ人しか参加できなかった。レオニダス王の遺骨はパウサニアスの手によって、王が戦死したテルモピュライから持ち帰られた (パウサニアス『ギリシア記』飯尾都人訳、龍溪書舎、1991年、3・14・1〈202頁〉)。レオニダスは救国の英雄として尊崇されたが、パウサニアスは、後半世、節を汚し、反逆者として死を迎えた。レオニダスには賞賛の弁論を、パウサニアスには誹謗の弁論をしたことは明らかである。弁論の中に、自作の韻文や古典詩の引用がなされると、結果的には歌競べになる。墓前では、一般的な競技が行われたとあるから、弁論も競技の形をとったと考えてもよい。これらの墓は劇場の前にあったので、競技の儀礼には好都合であった。

古代エジプトには、ランプシニトス王が建てたヘパイストス神殿の西の楼門の前に、高さ25ペキュス (約11メートル) もある二つの像があった。北の像は夏の像と呼び、丁重にとり扱ったが、南の像は冬の像と呼び、反対のとり扱いをした (ヘロドトス、2・121)。冬の像に対する人々の行為は、像を毀損するだけでなく、悪態や誹謗もあったと考えられる。中国南宋の宰相秦檜<sup>しん</sup>は、金<sup>きん</sup>との和議を主張し、主戦派の代表である將軍岳飛を投獄し、獄死させた。後世、岳飛は忠臣とみなされ、秦檜は奸臣・売国奴とみなされるようになった。中国各地の岳飛 (岳王) 廟には、鉄の檻に入れられ、鎖に繋がれ

た秦檜夫妻の（鉄の）像がある。人々は、夫妻の像に唾を吐きかけ、石を投げつけ、悪態をつく。ここでは、薤露・蒿里の名残はないが、岳飛に対する讃辞と秦檜に対する罵詈があったことは容易に想像することができる。

ホメロスの英雄パトロクロスは、ギリシア軍に加わって、トロイア城下に深入りする。しかし、アポロンに援けられたトロイア軍の王子ヘクトルによって討ちとられる。パトロクロスと血縁のある幼ともだちのアキレウスは、トロイア城外でヘクトルと対決する。ヘクトルはアキレウスを恐れ、トロイアの市を3周する。アポロンは彼を捨てたので、アキレウスは彼を討ちとった。彼は死に臨んで、埋葬を乞うが、アキレウスは彼の死体を戦車に結びつけて、引きずってゆく。パトロクロスの霊が現れ、アキレウスに埋葬を乞う。翌日、薪の山が築かれ、多くの犠牲と共に死体が焼かれ、多くの賞品を用意して競技が催された。アキレウスは、毎日、ヘクトルの死体を戦車に結びつけて、パトロクロスの墓の周りをかけめぐった。ヘクトルの父プリアモス王は、神々の仲介で、アキレウスから息子の死体を引きとり、トロイアに運んで壮麗な葬儀を営んだ（『イーリアス』第16巻、第22—24巻、呉茂一訳として『ホメロス』世界古典文学全集1、筑摩書房、1966年に所収）。パトロクロスの葬儀では、ヘクトルの死体が引きずり回され、それ自体が、一種の競技とされた。中国の岳飛と秦檜に喩えることはできないが、善玉を賞讃し、悪玉を誹謗するのは同じである。パトロクロスは、大きな薪の山の上で、多くの犠牲と共に火葬にされる。さらに、12人のトロイアの若者が殺され、火に投げ入れられた。これらの犠牲は、実際の競技の敗者ではないが、意味上は、敗者に等しい。

ギリシア神話のペリアスは、ネレウスと双子の兄弟であった。この双子が捨て子にされたとき、馬の蹄に触れて、痣（ペリオ）がついた方にペリアスの名がつけられた。痣は聖痕とされたので、ペリアスに正統性があったのであろう。ネレウスは追われる身となった。この中に、一種の勝負が見られる。ペリアスは、多くの者を殺害したので怨みを買った。あるとき、魔法使いメディアがペリアスを訪れ、若返らせてやるといい、羊を八つ裂きにして



## 葬礼競技その他 (1)

煮ると、子羊が釜から出てきた。ペリアスの娘たちは、彼を八つ裂きにして煮たが、彼は死んでしまった。ペリアスの子アカストスは父を葬り、盛大な葬礼競技を催した（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』「ペリアース」岩波書店、1960年、アポロドーロス『ギリシア神話』1・9より）。ペリアスは八つ裂きにされた。エジプトの冥界の王オシリスは、弟セトに殺害され、13の部分に寸断されて流される。妻のイシスは、八つ裂きにされたオシリスの遺体を集め（13番目の男根が失われたという版もある）、復活させた。これらの伝承の背後には、芋類を寸断して植えると、多くの子孫が生まれたり、1粒の穀物から数十倍の穀物がとれるという、穀霊の死と再生の論理がある。八つ裂きにされたペリアスの葬礼競技は、ペリアスの死と再生の儀礼であった。神話では、ペリアスは八つ裂きにされて煮られ、若返らないでそのまま死ぬが、現実の葬儀では、死体は八つ裂きにされて煮られ、葬儀の参加者によって食べられたのであろう。

パトロクロスを殺害した下手人は、ヘクトルであった。カール・モイリ「オリュンピア競技の起源」寒川恒夫訳・大林太良解説（『えとのす』新日本教育図書、1号、1974年、2号、1975年）は、葬礼競技の核は決闘、つまり、想像上の殺人者の発見と懲罰を目的とした神判であるという（2号、157頁）。被葬者が病死あるいは自然死した場合、下手人は病魔あるいは老衰となり、これらの災いを追放するための競技だとするのであろう。神話上の双子の兄弟は、兄か弟が自分の弟か兄を殺すか追放して、独立を達成し、始祖として尊崇される。ペリアスは、ネレウスを追放し、多くの殺害の下手人とされたが、その死に際しては、盛大な葬礼競技を催してもらっている。下手人はペリアス本人ではなく、ほかにいることを、競技によって決定しようとしたのであろうか。そうとは考えられない。

古代ギリシア人は、太陽暦8年（96月）と太陰暦99月が、ほとんど同じ周期であることを観測して知っていた。その差は1日半ほどであるので、古代の観測では、太陽と月が、8年ごとに同じ出発点に戻るとされた。太陽年の8年周期は、いわば、宇宙の死と再生の周期であった。フレイザーによると、

プラトンやピンドロスは、人間は9年目に再生するので、著名な人々の墓前では、彼らがこの世に再生するのを容易にするために、競技祭が行われたと考えた。8年間に1回の祭りは、4年ごとに1回行われるようになった。その理由は、8年の期間は、あまりに長すぎたからだ。古い王制、たとえばクノッソスやスパルタの王の在位期間は8年に限られていた（『穀物と野生動物の靈魂』I, ロンドン, 1912年, 84—85頁）。フレイザーは、8年の完結した周期が二分された理由を、期間があきすぎているためだとするが、そうではあるまい。1年周期の東アジアの世界においては、正月と盆や春分や秋分の2度にわたって祖先祭が行われる。古代ヨーロッパでは、5月1日のメイ・デイと、11月1日の万聖節が祖先祭の日であったと考えられる。いずれも、周期内に、2度、同じことを繰り返すことによって、死と再生の儀礼を完了したのであった。いずれの場合も、競走や競馬やレスリングが催され、死者の再生をはかった。祖先の死の下手人を探す祭りではなかったと思う。フレイザーによると、すでに古典ギリシア時代から、オリュンピア、ネメア、イストミア、デルポイで4年ごとに行われる競技祭は、死者のためのものであることが論じられた（『死にゆく神』92頁）。オリンピック競技は、英雄ペロプスによって創始されたといわれる。ペロプスは、父タンタロスによって寸断され、大釜で煮られて神々に供せられた。ペルセポネを失って悲嘆にくれているデメテルは、肩の部分を食べた。他の神々は、それと気付いて食べなかった。神々はペロプスを再生させ、欠けた肩は象牙でつくった。ペロプスは、再生して、以前より美しくなったといわれている。神話は、ペロプスの死と再生の儀礼において、競技が行われたことを述べる。ペロプスの死体を寸断して食べる風習があったことも示唆しているようである。

アクリシオスは、男の子を得ることについて神託を乞うたところ、生まれる子は彼を殺すであろうということであった。そこで、娘のダナエを銅の部屋に幽閉したが、ゼウスが日光に化けて彼女を犯したので、子供ペルセウスを出産した。アクリシオスは、ダナエと赤ん坊を箱に入れて流した。ペルセウスは、成人してから、妻アンドロメダと母ダナエを連れて、祖父に会いに

## 葬礼競技その他 (1)

アルゴスに向かった。祖父は、神託が実現するのを恐れてアルゴスを去った。たまたま、ラーリッサの王が、死せる父王のために葬礼競技を催した。ペルセウスも競技に参加し、円盤を投げた。円盤は、競技を見物にきていた祖父アクリシオスの足にあたり、祖父は死んだ。神託が実現したことを知り、彼は祖父を市外に葬った（アポロドーロス『ギリシア神話』79—81頁）。ペルセウスの出生と遺棄の話は、広く見られる捨て子の類型である。後半の、ラーリッサの先王の葬儀と、そのあとすぐつづくペルセウスの祖父アクリシオスの葬に意味がある。ここでは、ラーリッサの先王は、いわば善玉で、アクリシオスは悪玉にされている。神託が実現し、死を迎えた者は、市外に葬られているが、葬礼競技も行われず、無視された形になっている。

ペルセウスの出生は、このような伝承をもっていたが、エジプトのペルセウス（エジプトのケム神のことをいったらしい。W.W.ハウ、J.ウェルズ『ヘロドトス註釈』I, 2・91, オックスフォード, 1912年）の神殿は、ケンミスの町にあるが、神殿の外側の楼門には、石造の大立像が2基立っている。神殿にペルセウスが現れると、長さ90センチもあるサンダルの片方が残っているといわれる。ケンミスの町の人々は、ペルセウスのために祭礼競技を行い、家畜、<sup>クライナ</sup>外衣、獣皮を賞品に出す（ヘロドトス2・91）。日本の寺院の楼門に鎮座する一対の巨大な仁王像には、三尺ほどのわらじの片方を、それぞれ奉納してある。一対の仁王像は、片方が死、片方が生を象徴し、2体で1体を表わすので、各像に奉納するわらじは、片方でよいのである。神は、本来は片目、片足、片手であったので、神が出現すると、片方のわらじが見られたのである。

ペルセウス神の祭礼競技の賞品は、家畜、毛皮の外套、獣皮であった。家畜は食肉を調達するばかりでなく、祭礼の場で、生皮を調達することができた。クライナという外衣は、足許まで達する毛皮の外衣で、それ自体は、冬の衣料であったが、祭礼のときは、賞品としてそれなりの意味をもっていた。獣皮は、生のものであれ、半分鞣して柔らかになったものであれ、エジプトやギリシアでは、年末に神像に掛けたり、死体を包んだりするのに用いられた

(ヘロドトス, 前掲書, 2・42)。競技の優勝者は, 毛皮を手に入れることにより, 新しい1年間は, 再生することができた。同時に, ペルセウス神自体も, 優勝者のおかげで再生することができたのである。

天武天皇は, 14年9月18日, 宮中の大安殿に王卿らを召して, 博戯をした。翌19日には, 皇太子以下諸王卿48人に, ヒグマの皮とカモシカの皮を賜わった。24日, 天皇が病気になったので, 3日間, 大官大寺・川原寺・飛鳥寺で誦経させ, 3寺に稲を納めさせた。天皇の病気には, 白朮<sup>おけら</sup>を煎じて薬をつくり進上した(『日本書紀』)。天武天皇は, このころから健康が勝れず, いろいろと平癒のための手段を講じたが, この博戯もその1つであったと思われる。博戯は双六のような勝負ごとであった。その翌日, 天皇はヒグマとカモシカの皮を賜わった。この中には, 祭礼競技の名残が見られる。天皇は, 毛皮を与えることによって, 自らの延命息災を祈ったにちがいない。天武15年(7月20日に朱鳥元年に改元)1月2日, 天皇は, 王卿に無端事(あとなしことと読み, なぞなぞのようなものらしい)を尋ね, 正しく答えた者には, 褒賞を賜った。褒賞は毛皮ではなく, 衣服や布であった。衣服や布は毛皮より新しい形の, 再生のために身にまとうものであった。無端事は, 正月にする綱引き, 双六, 羽子突きなどの競技の1つであった。死から再生に移る新年に行った競技を天皇自らが行ったのである。朱鳥元年7月28日には, 78人の修行者を選んで得度させ, 宮中の御窟院で齋会<sup>とぎ</sup>を設けた。御窟院はみむろのまちと読み, 御窟殿と書かれたものも同じものであろう。窟という字から考えられるのは, 石造あるいは土造で, 入口のほかは窓も何もない建築物であらう。78人の修行者が, その中に入れるほど大きいものではなく, 彼らは御窟院の前で食事をとったのであろう。御窟院は, アラビアのメッカにあるカアバ神殿や, 新羅の善徳女王が建てた瞻星台と同じような石造物であったと考えられる。天武天皇は, このような石窟殿の前で, 病気の回復を祈ったのであろう。天皇の病いはついに癒えず, 元年9月9日崩御した。

1995年5月末, 奈良でスポーツ文化をテーマにした国際シンポジウムが開かれた。ナイル川の中流に位置するベニ・ハサンの15号墓には, 219組のレ

## 葬礼競技その他 (1)

スリングの取り組み図が描かれている。シンポジウムで記念講演した日本相撲協会相撲博物館の花田勝治館長によると、現在の相撲の取り組み48手のすべてが含まれているという（『朝日新聞』（夕）'95・6・10）。ベニ・ハサンの墓壁には、59組のレスラーが描かれているもの、122組のもの、219組のレスラーが描かれたものなどがある。これらの壁画は、前2050年頃の高官の墓に描かれたものである（ベラ・オリボバ『古代のスポーツとゲーム』阿部生雄・高橋幸一共訳、岸野雄三監修、ベースボール・マガジン社、1986年、48—51頁）。カイロに近いサッカーラにある、高官プタハ・ホテブ（前2300年頃）やメレルカ（前2250年頃）の墓には、先の尖った棒を、地面の標的に投げて競技する裸の少年たち、レスリングをする少年たち、ボクシングをする少年たち、フェンシングをする少年たちの浮き彫りや、ダンスをする男たち、ダンスをする裸の少女たち、綱引きをする少年たちの浮き彫りがある（オリボバ、前掲書、43—49頁。J. B. プリチャード『写真で見る古代中近東』ニュー・ジャージー、1954年、216、217図）。

墓壁に描かれた競技の絵や彫刻は、単なる墓の装飾ではない。競技が好きであった死者への手向けでもない。死者を再生させるために行った競技を、さらに墓中にまでもち込んだものであった。古代イタリアのエトルリアの墓壁画にも、競技・闘争のモチーフが見られる。タルキニアの通称「鳥占い師の墓」（前6世紀）の右壁中央には、2人の裸の男が、レスリングを始める姿勢をとっている。その右側には、頭に袋を被せられ、手には棍棒をもった裸の男が、犬と闘っている。犬は男の腿に噛みついている。犬は、左に描かれた別の着衣の男に、ひもで繋がれている。明らかに、男は犬を裸の男にけしかけている。タルキニアの墓壁には、その他、オリンピック競技といわれる絵や、野生動物の闘争図がある（『エトルリアの壁画』岡村崔撮影、青柳正規・大槻泉・新喜久子訳、岩波書店、1985年、18、20他）。壁画の中には、男女交合に牡牛を配したものがある。D. H. ロレンス（1885—1930）が1927年3月に、エトルリアの遺跡探求に出て、帰国後書き上げ、1932年に遺著として出版された『エトルリアの遺跡』（土方定一・杉浦勝郎訳、美術出版社、

1973年)には、「鳥占い師の墓」が生き生きと描写されている。また、「碑文の墓」では、当時すでに色が剥げかかって、消えそうになっていたレスラーとばくち打ちの絵を見ている(143—144, 108頁)。エトルリアでも、祭礼競技が行われたことが分かる。野生動物や交合の図は、死者が祖先獣の世界に生まれ変わるといふ思想があったことを物語っている。

「鳥占い師の墓」の二人のレスラーの頭上には、2羽の鳥が、左にいる神官が差し出す左手に向かって飛んでゆく。神官は、右手に笏をもって目をこらしている(池田正三『エトルリア芸術の逍遙』大阪芸術大学, 1980年, 88頁)。笏は長さ60センチほどのもので、牧杖のように先端が曲っている(池田, 前掲書には杖とある。ロレンス, 前掲書, 144頁には曲った笏とある)。わが国の高松塚古墳の西壁の女子群像のうち、向かって右から2番目の、赤い衣服を着た女子が、左手にしている棒の先端部には、5本の指の形がはっきりと認められる。仏教で用いる爪杖の一つであり、孫の手の同類である。それは如意の原形をなすもので、被葬者が仏教徒であったことを示唆する。これに対して、この爪杖は、ポロ球戯で球を打つ杖を表示しているという説(森本治吉『朝日新聞』(夕)'75・4・22)もある(松浪健四郎「古代日本のスポーツ(6)」『GITEN』57号 天理やまと文化会議, 1990年, 143—144頁)。ポロの球杖説は、葬礼儀礼で打球が行われたと考えることができ、きわめて興味ある説である。しかし、壁画には球戯の図はなく、画中の僧(尼)が首に掛ける頭陀袋などを参照すれば、仏教儀礼の爪杖と見る方が相応しい。

1979年、グアテマラ北部で、ナフ・トウニチ洞窟という、マヤ文明最大の洞窟が発見された。近くには、マヤ古典期最大の神殿都市ティカルがある。その洞窟の中には壮大な墓室が設けられ、数々の絵文字と不可思議な壁画が残されていた。球技者や戦士のさまざまな姿態、性器をむきだしにして抱き合う男女、その性器を傷つけて血を流す人物、瞑想する神官などの絵である(宮西照夫『マヤの死の儀礼』大阪書籍より, 山折哲雄『神秘体験』講談社, 1989年, 153頁)。マヤの墓室壁画のモチーフが、旧大陸のそれと殆ど全く同一であるのは興味深い。葬儀では球戯が行われていたことがわかる。ポロに

## 葬礼競技その他 (1)

類するものなら、球杖が用いられたはずである。しかし、エトルリアの壁画の笏や高松塚の壁画の爪杖は、球戯の球杖とは考えられない。球戯は男子のスポーツであるので、高松塚古墳壁画のように女子がもつのはおかしい。邵文良『中国古代のスポーツ』（ベースボール・マガジン社、中国・人民体育出版社、1985年）に載せる撃球（馬球）の図（130—152頁）と捶丸の図（156—160頁）に見られる球杖は、笏や爪杖ではない。捶丸は、数人の女子が行うものであるが、高松塚の古墳壁画には、そのような雰囲気は描かれていない。笏や爪杖は、死者をよみがえらせる治癒の手であった。マヤの墓壁画に見られる戦士のさまざまな姿態は、エジプトのベニ・ハサンの墓壁画にあるレスラーのさまざまな姿態を想起させる。これらの戦士は、葬礼の模擬戦をしていると考えられる。性器を傷つけて血を流す人物に関しては、13の部分に寸断されたオシリスが、妻のイシスに集められて再生したとき、男根だけが紛失して見つからなかった神話を思い出させる。男根の毀傷は、被葬者の再生のために必要な行為であつたらしい。

邵文良、前掲書には、吉林省中安県の舞踊塚（3世紀中葉—4世紀中葉）の狩猟図壁面や角抵図壁面、吉林省集安県の角抵塚の角抵図壁面、河南省密県打虎亭（後漢）の角抵図壁面などの写真が掲載されている。さらに、塚ではないが、あの世にはちがいない甘肅省敦煌県莫高窟第249窟（西魏）の狩猟図壁面、第290窟（北周）の太子相撲図壁面、第61窟（宋代）の太子武術練習壁画など、多くの競技、闘争図が見られる。莫高窟には、仏伝のさまざまな段階が描かれているので、角力や射弓の場面は、ほんの一部に過ぎないが、それらの武芸が行われた段階は、釈迦にとっては重要な節目であった。

皇極天皇元年5月21日、百済の大使翹岐<sup>ぎょうき</sup>の従者の1人が死に、22日、翹岐の子が死んだ。24日、翹岐は妻子を連れて、大井（河内長野市大井）に移り、人を遣わして子を石川に葬らせた。7月22日、健児<sup>ちからびと</sup>に命じて、翹岐の前で相撲をとらせた。（『日本書紀』）。森浩一は、この記事から、相撲が葬式の儀礼と結び付くと考えた。さらに、『日本書紀』には、垂仁天皇の時代、野見宿禰<sup>のみのすく</sup>と当麻蹠速<sup>たぎまのくえはや</sup>の2人が相撲をとり、野見宿禰が当麻蹠速のあばら骨を踏みく

だき、彼の腰を踏みくじいて殺したとある（7年7月7日）。森は、野見宿禰は土師<sup>はじ</sup>氏の祖で古墳をつくる集団である。当麻氏の方も、葬式に関係のある集団である。彼らは相撲をとる風習をもった集団ということができると考えた（大林太良編『日向神話』学生社、1974年、155—156頁。大林太良『葬制の起源』角川書店、1974年、219頁以下、前掲モイリその他の例と共に。初版、1965年にはない）。土師氏や当麻氏は、唐の長安の東市、西市の凶肆の従業員が歌競べをしたように、職業として葬礼競技を行ったのである。

東アジアでは、旧暦の7月7日や7月15日さらには8月15日は、死者の霊を祭る日であった。7月7日は七夕の日で、年に一度、男女が交会する日であるが、ローマ建国の祖ロムルスが死んだ日でもあった。死者の霊が、男女の交会によって、女子の胎内に宿る日にもなっていた。7月7日の6か月前の1月7日は、中国では人日と呼ばれたが、この日は、10日、12日あるいは15日にわたる正月の前半部の終わりの日、あるいは後半部の始まりの日でもあった。正月の前半部は、死の儀礼に当てられ、後半部は再生の儀礼にあてられた。1月7日は、古くは処刑の日でもあった。7月7日と同じように、1月7日も死と再生の日であった。1月15日と対応する7月15日は、小正月に対応する祖先祭りの日であった。小正月も古くは、祖先祭りの日であったことはいうまでもない。朝鮮の8月15日（秋夕）の行事の中に、その伝統が見られる。秋夕は、7月15日の行事を再認する日であった。洪錫謨『東国歳時記』8月の条にいう。8月15日は秋夕といい、新羅時代からの風俗である。地方の農村では、秋夕を1年のうちのもっとも重要な名節とする。慶州では、新羅の儒理王（在位紀元24—56）のとき、慶州6部を2組に分け、王女2人がそれぞれの部内の婦女たちを率いて、秋の7月15日から（8月15日まで）6部の庭に集まり、麻紡ぎの競争をした。それは、毎日早朝から始まり、2夜にわたって止めるが、8月15日には、麻紡ぎの多少をもってその成績を考査し、負けた組は酒食をととのえて、勝った組をもてなした。濟州島では、毎年8月15日には、男女が集まって歌舞を行ったり、左右2組に分かれて綱引きをした。また、ぶらんこや捕鶏などをして戯れた（『朝鮮歳時記』姜在



## 葬礼競技その他 (1)

彦訳注，平凡社，1971年所収，125—128頁）。

朝鮮では，中元の7月15日から8月15日までの1か月間，祖先祭りを行い，最後の8月15日が最終日として，盛大に祭られたようである。ここでは，女子祭りときれ，麻紡ぎ競争が行われた。男女が参加する綱引きは，日本でも小正月や旧の8月15夜の中秋の名月の日などに行われるが，祖霊の再生を祈願する祭礼競技がもとの形であったと思う。柳田国男『食物と心臓』にいう。葬送の当日，硬米で餅を搗き，4つの餅は別置き，あとの餅を49に分けて串に挿し，焼いて会葬者に食べてもらう。4つの餅は，新墓の前で，死者にもっとも近い兄弟が引き合ってちぎり，肩越しに後ろへ向けて投げ，後ろをかえり見ずに帰る（『定本柳田国男集』第14巻，269頁）。この行為は，死者の前，あるいは墓前で綱引きの競技をした名残りと思われる。正月15日は，神式の小正月とし，16日を仏の正月とする風がある。この日に先祖の墓の初詣でをし，そこで餅を引き合う風習もある。肩越しに後ろに投げたり，後を振り向かないで帰る風俗は，死者と生者の訣別を意味する。その直前に，餅を引き合って，死者の魂を元気づけている。

葬礼競技としての綱引きについて述べておきたい。綱引きの綱は，蛇そのものであったという伝承がある。それも，雄雌2匹が頭部を結ばれて，人々が引き合うのだという。神社や鳥居に張られるしめ縄や，ときには仏寺の門にも張られるしめ縄の起源も蛇であったという説がある。これらの説は，卓見であるといえる。蛇は冬場は墓穴を利用し，春になると地上に出てくるので，死者そのものの化身とされたり，地下の宝物の守護神とされたりした。これらの考えにもとづいた仏教説話は多い。東洋以外にも，この種の話がある。アイネイアスが亡き父の墓に詣でたとき，大蛇が現われたので，彼は父の使いだと思った。蛇はたぶん，父自身で，彼を迎えたのであろう。ギリシアのデルポイには，ピュトンという大蛇がいた。アポロンがデルポイに来てこの大蛇を射殺し，オンパロス（へそ石）の下に埋めた。ピュトンは，幼児アポロンに殺された老衰したアポロンで，へそ石すなわち祭壇の下に葬られたのであった。蛇は，祭壇の下から出てきて，祭壇の上に立てた柱を上ると

考えられた。古代メソポタミアの神殿の入口の門柱を上る蛇は、同類である。両方の門柱を立てる前に、柱穴に供物として蛇を入れる習俗があったことを前提とする。あるいは、蛇はガイア（大地）の子であるので、このような前提がなくても、地上に現れることができるかも知れない。ヘルメスがもつカドケウスの杖には、左右対称に2匹の蛇が立ち上っている。カドケウスの杖は、アポロンがヘルメスに与えたものなので、デルポイのへそ石から柱に匍い上った蛇を連想させる。ヘルメスは境界神で、ヘルメスの手にするカドケウスは、境界石の上に立つ柱であった。境界石はへそ石であり、へそ石が世界の中心を象徴するように、境界石は見方を変えれば、世界の中心となった。アポロンとピュトンの闘争は、競技の1種で、へそ石の前で行われた。へそ石に祭られる境界神は、ピュトン自身であった。ピュトンは、競技で殺されることによって、自らが再生したのである。蛇を殺すとき、境界石の前で、引っぱってちぎったわけではない。しかし、ピュトンの化身であるアポロンとピュトン自身が殺し合いをした。ディオニュソス（バックス）の祭りでは、バックスの信女たちが、蛇を食いちぎりながら、半狂乱の状態になって行列して進んだ。ときには、野獣や人間の赤子を八つ裂きにして、それを食らいながら、血まみれになって祭りに参加した。蛇や動物を寸断するのは、それらの動物が代表する神が再生するための呪術的行為であった。動物が寸断されるのは、動物が人間と闘争した結果、食いちぎられたことを意味する。綱引きの原型は、人間によって寸断される蛇であった。

水上では、これが竜船競渡となった。古くは、6世紀の『荆楚歳時記』（宗懐著・守屋美都雄訳注、布目潮風他補訂、平凡社、1978年）の5月5日の条にある。この日、競渡し、薬草を採る。昔、屈原が5月5日、<sup>べきら</sup>汨羅に身を投じたので、その死を悼んで競渡するのであるが、溺れた屈原を救う意味もある（149頁）。競渡は、屈原のための葬礼競技であったことがわかる。顧禄『清嘉録』（中村喬訳注、平凡社、1988年）の竜船行事の訳者注に引く『<sup>はようき</sup>鄱陽記』によると、荆楚地方では、江中に竿を立て、その先に神衣に見立てた綵帛を掛け、これを各船が争奪した（140—141頁）。『新約聖書』の福音

## 葬礼競技その他 (1)

書が伝える所では、ローマの総督ピラトの配下の兵士らが、イエスを十字架に掛けたとき、くじ引きをして、イエスが身につけている衣服の部分部分を分け合った。彼らは、イエスが処刑されたあと、十字架から降ろされると、争って血に染まった衣服を奪い合った。イエスの衣服には、霊能者の力がこもっていた。それは、中国の竜船が争奪し合ったあやぎぬと同じものであった。アフガニスタンの新年行事の1つに、柱の先端にぶら下げた何条かの布を、柱を上って奪い合うのがある。この布切れは、中国の競渡で争奪するあやぎぬと同じものであり、古い北ヨーロッパの新年に立てるメイ・ポールの柱頭から垂れ下がる色とりどりの布テープとも同類である。メイ・デイには、学校の児童が中心になって、これらのテープの端の1つ1つをもって柱の周りをまわって柱に巻きつけ、5色の柱をつくり、また逆方向にまわって、もとの状態にもどす行事がある。5色のテープを争奪する習俗は後退した観があるが、これらのテープも、新年における再生に必要な霊力のある布であった。

ヨーロッパの5月1日は、11月1日の万聖節と対になった節日で、日本の正月と盆や、春の彼岸と秋の彼岸に相当する。ヨーロッパの5月1日と東アジアの5月5日は、季節的な同一性があるのではなく、一年のうちの月の序列に同一性があることに注目すべきである。5番目の月、つまり5月が、古い時代に新年であったことを示唆している。競渡は、東南アジアの稲作農耕民族における雨乞いの儀礼であるという学説がある（前掲『荆楚歳時記』152頁）。注釈者もこの説に賛成している。競渡で、竜が互いに競って雨を呼び、見物の歓呼の音が、水中の竜を鳴かせ、ひいては雨を招くと信じられたのかも知れないと論じている（前掲書、153頁）。竿に吊した布は、竜蛇の象徴であったと思われる。メイ・ポールから垂らした5色のテープも竜蛇を象徴したものであろう。メイ・ポールに巻きつけて、5色の柱をつくるが、これも竜蛇そのものであったと考えられる。それが、霊力をもった布とされるようになったのであろう。棒の先端に蛇をくくりつけ、行列の先頭を行く者がもって歩く習俗があるが、竿にあやぎぬをつける段階がこのあとにきたのである。

バックス（ディオニュソス）の信女らが、祭りの行列で、蛇を咬み切りながら進んだが、古い段階の風習であった。

モンゴル族のオボ祭りは、旧暦5月13日に行われる。山や丘の頂、あるいは峠にあたる場所に、自然石を積み上げ、上部の中央にダオゲシルという柱を立てる。石積みは、2段あるいは3段になったものがある。1つ1つの石積みは祭壇であるので、祭壇を重ねたものと思えばよい。柱の上端には、ラマ教の影響を受けて、擬宝珠がついているが、その下は、フェルトを芯にして5種の色彩の布が巻いてある。この部分から、4本の縄が四方に張られ、縄の先端は地上の槍に固定される。柱の位置は、地上3—4メートルあるので、縄が地上に達する長さは7—8メートルはある。これらの縄に、ヒーモリという色とりどりの布切れが挿しはさんであるので、小型の布を洗濯ロープに干した観を呈する。これらの縄は、みな右織りであるので、韓国や日本の左織りの禁縄とは異なる。縄が張られていない場合、オボの上部には、色とりどりの布を結えた何十本という棒あるいは柱が立っている（大塚和義「モンゴル族のオボ祭りと牧畜」『えとのす』23号、1984年、21頁他。秋葉隆『朝鮮民族誌』名著出版、1980〈1954〉年、266頁。原山 煌『モンゴルの神話と伝説』東方書店、1995年、241—244頁）。

競渡のときに立てられる柱や、メイ・ポールの同類がここにも見られる。オボの祭りは、旧暦5月13日だけでなく、新年にも行われるので、アフガニスタンの新年祭で見られる5色の布の垂れ下がった棒も同じものである。モンゴル人は、オボの祭りで布を争奪するかどうかは知らないが、祭りのあと、競馬や相撲をする（秋葉、前掲書）。スリランカ（セイロン島）のアダムス・ピークの山頂には、中心部に凹みのある巨大な岩盤がある。いわゆるへそ石で、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教の信徒らが参詣する場所である。ここには、各所に網が張りめぐらされていて、色とりどりの布が掛けてある。へそ石は祭壇で、凹みには、金銭や貴金属、宝石などの装身具が投げ込まれている。アダムス・ピークの聖所は、モンゴルのオボと同じ構造をしていることが分かる。祖先崇拜や死者崇拜の

文化圏では、これらの布切れは、死者が身につけていた屍衣の一片で、非常な霊力をもったものであった。死者が帰るトーテムの世界の、トーテムの皮を古くは意味したが、毛皮から植物性の布へと衣服が変遷してしまったので、本来の意味は忘れられてしまった。シマヘビやニシキヘビの姿が、5色のあやぎぬで表されたといっても、理解に苦しむかも知れないが、それらは死者を代表するものであった。その前で、葬礼競技をしたのである。現在のイスラム圏である中央アジアから北アフリカにかけての墓碑を立てる習慣のない庶民の埋葬地には、1メートルほどの木の枝が立っていて、先端から屍衣を裂いた布切れが垂れ下がっている。これは、埋葬場所の目印にはなるが、やがてなくなってしまう。布切れは、それ以前は獣皮（蛇の皮を含む）であった。それは、部族や個人を表わす旗の原型であった。この地域の聖所には、岩場があるが、その割れ目に、布切れを結えた枝が挿し込んである。岩はへそ石で、その周りには、このような布切れが無数に見られる。聖所の前で、祭礼競技を行うことは絶えて久しいが、かつては褒賞として出された布切れ（古くは獣皮）は、参加者1人1人がもち寄り、互いに交換し合ったのである。これによって、参加者全員が勝者となり、神あるいは死者をよみがえらせ、自分自身もよみがえることができた。

聖所における布切れが、蛇を象徴したことは上述したとおりであるが、祭壇に供えられた雌雄一對の蛇を闘わせて、祭神を賦活すると同時に、豊凶を占った。『えとのす』10号（1978年）に、沖縄の民俗などを取材した写真がある。沖縄では、綱引きは、旧6月15日や25日の稲の穂祭りに行ったり、旧8月15日前後の穂祈りのときに行ったりする。場所によって日付はちがう。綱は雄綱と雌綱を結合して引き合うのであるが、綱を結合させるとき、性的な所作をする。多くの村では東と西に分かれて引き合う（20頁）。沖縄の綱引きの綱は、観光名物の1つになっているので見ることができる。九州でも、綱引きは、盆か旧8月15日（中秋の名月）の夜に行く。近畿以東では、綱引きは正月行事で、盆・中秋・端午の例は少ない。綱引きの綱を大蛇に見立て、大蛇退治の故事にならったとする所も多い。大阪市浪速区元町の八坂神社で

は、長さ16間、太さ1尺5寸、重さ80貫の<sup>やまたのおろち</sup>八岐大蛇をつくり、とぐろを巻かせたあと、正月14日町内を練りまわる。そのあと、御旅所で「<sup>なんば</sup>難波の綱引きヨイヨイヨイ」とのんびりした歌声と共に綱引きをする（西角井正慶『年中行事辞典』東京堂、1958年、499頁）。正月14日には、神戸市灘区徳井の応仁神社でも綱引きがあった。大津市でも、三井寺門前の住民と、大津の町民の間で、正月13日の深夜に綱引きがあった（鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店、1977年、237頁）。

写真家小川光三は「カミとホトケ」という論文で、蛇綱引きを論じている。奈良県<sup>ごせ</sup>御所市の野口神社では、5月5日に、藁で10メートル余りの蛇体をつくり、集落中を練り歩いてから、拝殿横の<sup>いわくら</sup>磐座に蛇体を巻きつけて蛇穴をつくる。蛇穴とは、蛇がトグロを巻いて穴をつくったような状態になることをいう。大和の三輪山の神は蛇体で、巨大な蛇が7巻き半している姿が三輪山だと伝えられている。古代人は、堂々とトグロを巻いた蛇穴から、祖霊神が出現すると考えた。吉野裕子によると、古い時代には、蛇を人間の祖神とする思想が世界の各地に定着していたという（『東アジアの古代文化』50号、1987年、213—214頁）。野口神社でも雄綱と雌綱をつくり、綱引きをするが、中国の競渡を行う5月5日にする。磐座はへそ石で、ギリシア神話では、大蛇ピュトンがアポロンにより殺され、その下に埋められている。ここでは、大蛇が死に、アポロンが再生したのである。橘南谿の『西遊記』続編、巻之5に、鹿児島に遊んだ紀行がある。鹿児島では、8月15日、太い腕のような、長さ半町、1町もある大綱をつくり、大道のまん中に引き渡し、夜中に、小児や青年が総出で綱を引き合う。昔は、上方にもあったが、辺土にだけ残った。人々は門口に出て、三味線を引き、酒を酌んで遊ぶ（『東西遊記』2、宗政五十緒校注、平凡社、1974年、183頁）。橘は方言周圏論や波動論が論ずる現象を何げなくいっている。中心地である上方にも、昔は8月15日の綱引きがあったが、その習俗が廃れて、新しい習俗にとって代わられたというのである。ただ、近畿以東の綱引きは、8月15日ではなく、正月が多いのは、説明を要するが、省略する。鹿児島の中秋の名月の夜に限ったことではない

## 葬礼競技その他 (1)

が、綱引きが、その他の競技とちがって、夜中に行われたことは、注目すべきである。華燭の典と呼ぶ結婚式や、葬礼は古くは夜中に行われた。綱引きは、境界性の強い、再生の行事であった。

正月と盆は、年に2度の節目で、春分と秋分、ヨーロッパの5月1日のメイ・デイと11月1日の万聖節と同じように、祖先霊がこの世に帰ってくる日であり、生者は祖先霊を訪ねて神社・仏寺やキリスト教会堂などのような聖所に参詣する日である。正月と盆には、葬礼あるいは祭礼の競技をして、ご先祖も自分たちもよみがえろうとしたのである。綱は、大蛇に見たてられ、すきのをのみこと素戔鳴尊に退治された八岐大蛇にされる。スサノヲの蛇退治は、単なる英雄のロマンスではない。それは、宇宙の更新、生命の更新、それを代表する王権の更新に付随する行事であった。祖霊である蛇が、もっとも旺盛な生命力をもっているときに、正月や盆のような節目に、それを殺害することによって、その霊力を殺害者の身に移したのである。殺害者は、蛇と闘う人間であったり、蛇そのものであったりした。古い正月であったと思われる5月1日のメイ・デイや5月5日の端午にも、蛇の闘争が行われたのはいうまでもない。

中国の古い正月である立春にも綱引きが行われた。『荆楚歳時記』の正月・立春の条に、しこう施鈎の戯をなす。縄をつくって相引くのであるが、綿々として数里にわたり、太鼓の音に合わせてこれを引くとある（前掲書、57頁）。鈎の字は、雄綱と雌綱の結合部分のカギを想起させる。注釈者は、『隋書』の出典をあげ、この綱引きが豊穰祈願のためであったという（58頁）。古い新年である初春の綱引きが、一年を活性化するものであるのも、結果的には、一年を豊穰にすることになる。『荆楚歳時記』には、立春には施鈎のほか、打毬、鞦韆の戯をなすとある。両方とも、女子がした競技であった。鞦韆はぶらんこのことで、北方のさんじゅう山戎から、中国の女子がこれを学んだとある。鞦韆は、いかに空高く飛翔するかを競う遊びで、それ自体は、作物の成長呪術でもあり、豊作の予祝ともなる。

東南アジア各地に見られる綱引きは、性交の仕草を伴った競技になっている。寒川恒夫「たたかいの文化」（『is』41号、ポーラ文化研究所、1988年）

にいう。インドネシア東部のタニンバル島では、雨が降らないと、雨が降るまで、男組と女組が性交の動きを摸しながら綱引きをする。この裏には、天父と地母の聖婚観があり、最初の雨は、天父の精液であるとされる。メラネシアのトロブリアンド島では、綱引きで男組が勝つと、雄叫びをあげながら、女組の方に突進し、性交する。男女が営む新年の綱引きは、性のたたかいを性の結合の中に止揚して、豊穡をもたらす文化装置である（52—53頁）。性交は、男女の死者の魂が、子宮の中に入ることであるので、東南アジアでも、古くは死者の前で、葬礼競技として綱引きが行われたと考えられる。この地方では、農耕開始時が新年となるので、雨を絶対に必要とした。このような背景があるので、葬礼競技はたちまちのうちに、農耕儀礼となったのである。

蛇足ということばがある。劉向『戦国策』に、有名なことばの出典がある。楚の国に祠堂をまつる者がいた。彼は仕える者らに、大盃にもった酒を賜わった。彼らはいった。数人でこの酒を飲んだら足りないが、1人で飲めば余るほどある。さあ、地面に蛇を描き、最初にでき上がった者が、酒を飲むことにしよう。そのうちの1人の蛇の絵がまずできあがった。彼は左手に盃をもち、右手で足を描きながら、俺は、蛇の足も描くことができるぞといった。彼が足を描き終わらないうちに、別の者の蛇の絵ができ上がった。彼は盃を奪い取って、蛇にはもともと、足なんかない。君はどうして、足なんかつけるのかとって、酒を飲んでしまった。蛇足をつくった者は、ついに酒を飲みそこねてしまった（第九 齊）。ここでいう祠は、蛇を祀る祠堂のことをいった。古くは、この祠堂で蛇を闘わせていたが、いつの時代からか、人間が蛇の絵を描いて競技するようになったのであろう。足のある蛇は竜のことである。祠堂の祭祀では、竜と蛇の闘争が行われたが、後になって、竜蛇の絵を地面に描く（人間同士の）競争になってしまった。盃に盛った酒が賞品であった。ここでの賞品は、もう毛皮や衣服ではなく、単なる酒になってしまった。祠堂の祭神は、祭りのとき、優勝した者に祝福されて再生したのである。祠堂には、供物として、竜蛇の絵、つまり絵馬を捧げる習慣が、この時代には、すでにあったと考えられる。絵馬の絵の早描きで、賞を競った。



## 葬礼競技その他 (1)

日本には、神社の祭神に奉納する奉納相撲がある。奉納相撲は、奉納という観念が前面に出てきて、祭神を再生させるという本来の意味は忘れられた。祭神にご覧に入れて、おなぐさめするつもりで、神と人が共に歡び合うのだと参加者は考える。R.カイヨワはいう。定期的なスポーツの祭典は、犠牲と行列を伴っていて、神に捧げられるこの祭りは、それ自体が1つの供物であった。すなわち、努力や伎倆や優美などを神に捧げたのである。このスポーツ競技は、何よりも、1種の祭祀であり、敬虔な礼拝式典であった（『遊びと人間』清水幾太郎、霧生和夫訳、岩波書店、1970年、86頁）。カイヨワの解釈は、社会的現象を考古学的に分析するのではなく、考現学的に考察する立場に立つので、参加者がなぜ競技したかについては、関心がない。犠牲と行列は、死から再生に移行するさいの通過儀礼で、祭神を再生させるための儀礼である。

中央アジアでは、男の子が生まれると、集落では、お祝いのための競馬、相撲その他の行事をする。これは遊牧民も定着民も変わらない。遊牧民の場合は、2、3歳になると馬に乗ることを教える。7歳または12歳で割礼を施し、近所の人々を呼んで盛大に祝う。富める人は、多くの人々にご馳走をし、競馬や相撲をするのは、誕生のときと同じである。しかし、男の子の割礼のときが、いちばん盛大である（加藤九祚「中央アジアの人びとの一生」『世界口承文芸研究』第4号、大阪外国語大学口承文芸研究会、1983年、14—15頁）。イラン東北部のゴルガン地方には、トルクメン共和国に住むトルクメン民族と同じ民族が居住している。彼らが定期的<sup>いち</sup>に開く、ステップの中の市では、競馬が行われる。市は、死者儀礼の名残をいくつか留めているので、競馬は、市の客集めや景気をあおるための催しではなかった。本来は、葬礼競技であった。誕生や割礼で行う競馬も、お祝いにはちがいないが、祭礼競技であった。

誕生、結婚式その他の大きな祝いごとのとき、中央アジアから、アフガニスタンにわたって、ブズ・カシーと呼ぶ、馬に乗って山羊を奪い合う競技が行われる。ブズ・カシーとは、ブズ（山羊）とカシー（引く、争奪すること）

から成ることばで、祭礼競技として伝えられている（国立民族学博物館にフィルムがある）。競技が始まる出発点から2—300メートル先の広場に、山羊を殺して投げ込む。すると、10人余りの騎乗者が、馬に乗って、それをとりにゆく。山羊を奪いとった者は、決勝点に向けて逃げるが、四方八方から、敵が追っかけてきて、それを奪い返そうとする。結婚式の場合は、花婿の家の中庭が決勝点になる場合もある。山羊をもって、婿の家の門をくぐり、中庭に入った者が勝者となる。勝者は、満座の前で称讃される（加藤，前掲書，19—20頁）。ブズという語はブーズと発音すると、葦毛の馬の意となる。ブーズ・カシーとなると、葦毛の馬の手綱を引く意味になる。白毛に黒毛が混ざった葦毛の馬は、日本でもそうであるが、中央アジアや西アジアでも、境界の儀礼で用いられる馬である。単なる馬として用いる場合、ある種の禁忌がともなうらしく、いい値段がつかない。替え馬として用いるとき、この種の馬は、栗毛で、脚もとが白い馬と同じように、避ける。日本では、白足袋をはいているとって避けるのであるが、あちらでも似たような理由で忌避するようである。ブズ・カシーは、馬の競技ではなく、賞としての山羊（あるいは小羊）の奪い合いである。古代では、競技の賞品に、家畜や獣皮が出た。それは、祖先獣と考えられた獣やその毛皮であった。ブズ・カシーの山羊も、もとは祖先獣で、それを殺害して、それがもつ霊力を祭りの当事者に移したのである。

皇極天皇元年（642）5月5日、河内国の依網屯倉よさみのみやけの前に、翹岐らを呼んで、騎射を見物させた。21日、翹岐の従者が死んだ。22日、翹岐の子が死んだ。24日、翹岐は妻子を連れて、百済の大井の家（河内長野市大井）に移った。人を遣わして、子を石川に葬らせた（『日本書紀』）。同年7月22日、前述したように、力士に命じて、翹岐の前で相撲をとらせた。子が死んで、2か月目の忌日に葬礼競技を行っているが、仏教の七七日とは関係のない日である。ところで、5月5日の騎射のことであるが、対象となった鳥獣は、雉、野猪、鹿の類であったと考えられる。飼育したこれらの鳥獣を放して、騎射したのであろう。ブズ・カシーのような獲物の争奪戦ではなかったと思う。

翹岐の子の容態が悪いので、魂鎮めをするために、親の翹岐を呼んで射獵を見させたと考えられる。

5月5日は、古くから競馬くらべうまをする日であった。文武天皇の大宝元年(701)5月5日、群臣の五位以上に走馬を出させ、天皇が臨視した。聖武天皇の天平19年(747)5月5日、天皇は、南苑に御し、騎射、走馬の両方を観た(『続日本記』)。京都の上賀茂社では、毎年5月5日、競馬会神事を行う。吉田兼好は、5月5日、賀茂の競べ馬を見に行ったが、車の前に群集が立ちただかって見えないので、各自、車から降りて、馬場の柵に近寄ってみたものの、そこには、ことさら人が多く立ち込んでいて、割り込むこともできなかった(『徒然草』第41段。五十嵐謙吉「競馬」『月刊百科』平凡社、1993年5月)。端午の競技として、中国には竜船の競渡があったことは、前述したとおりである。竜と馬は、形態は異なるが、馬は水辺で竜の種を宿すことによって、竜馬を生むことができた。5月5日に、水上と地上で行われた競渡と競馬は、いずれも、祖霊の力を身につけるための競技であった。長崎のペーロンペーロンや沖縄の爬竜船の競争も、中国の5月5日の競渡を受け入れて、変容したものである。竜の競争と馬の競走は、水上と陸上における、同類のもののの競技と古くは見なされたのであろう。

石合戦いんじうちを印地打いんじうちといった。おそらく、石打ちということばの訛り「インシウチ」が「インヂウチ」になったものであろう。印地打ちも5月5日の行事であった。菖蒲刀という木太刀を腰にさし、頭巾をかぶって山伏の姿をし、石を投げ合って、敵の陣地に入り込んだ方を勝ちとした。川を挟んで石合戦をする例がいくつもある。徳川家康が竹千代といった幼時、安倍川原の石合戦を見た話は、人口に膾炙している。石合戦つまり印地打ちは、小正月にもあちこちで行われるので、単なる遊戯でないことは、明らかである(西角井、前掲書、70頁)。昔の京師の兒童は、柳の木刀を腰に差し、頭巾を着して山伏の姿をし、晩になってから、鴨川の辺りに出て、左右に分かれて礫を投げ合った。地上では、印をつけて界を分かち、それから、柳の木刀で打ち合い、勝って相手の界に入るのを善とし、負けてわが界を逃げ出すのを悪とした。

それ故に、印地の名がある（『年中行事大成』3・下・5『廣文庫』第2冊、176頁所収）。印地の語源はともかくとして、京都でも江戸時代、川原での石合戦と地上での木刀での模擬戦が行われたことが分かる。水上と陸上での竜馬の闘争儀礼の変種であろう。似たような競技が、ボルネオ島中央部に住むカヤン族によっても行われる。メンダラム川流域に住む、焼き畑、陸稻栽培民族であるカヤン族は、播種時にさいして、独楽まわしや仮装の儀礼を行う。米の収穫時には、石鉄砲にこめた粘土でつくった弾丸を互いに撃ち合う。以前は、木刀で打ち合う模擬戦が行われた。新年には、相撲、高跳び、幅跳び、競走をする。女たちは、水を満たした竹の柄杓や水鉄砲を武器にして、互いに闘争する（W.ニューヴェンホイス『ボルネオ横断記』I、ライデン、1904年、169頁以下）。カヤン族は、穀霊の死を象徴する収穫時に、石合戦と木刀による模擬戦をしていた。死んだ穀霊が、再生することを願う呪術であったにちがいない。日本の場合もそうであるが、ボルネオ島のカヤン族の場合も農耕と深い関係をもっていた。日本の場合、年占とする解釈が行われるが、カヤン族には当てはまらない。

木刀戦と石合戦は朝鮮にもあった。洪錫謨『東国歳時記』によると、5月5日の端午に、青壮年たちは左右に分かれ、旗をたて、鼓を打ち鳴らし、雄叫びをあげながら、勇躍して雨あられと投石する。勝負が決まってから、投石を止めるが、たとえ死傷者があっても後悔せず、地方の守令といえども、これを禁止することはできなかった（108頁）。石合戦は、1月15日の上元の日にも行われ、辺戦と呼ばれた。ソウル三門（南大門、東大門、西大門）外および阿峴<sup>げん</sup>の人たちは、群を成し、隊を分かち、あるいは棒をもち、あるいは投石し、喊声をあげながら、互いに肉薄して、万里峴という峠の上で接戦の状態に入る。これを辺戦といい、退却した方が負けとなる（59頁）。石合戦は、5月5日や1月15日に行われたが、前者の場合、旗をたて、鼓を鳴らしたとあるから、模擬戦の木刀を振りまわしたと思われる。『朝鮮を知る事典』（平凡社、1986年）によると、万里峴は、現在のソウル駅西方の小高い峠で、東軍と西軍に分かれて石を投げ合い、西軍が負ければ、ソウルの北方

## 葬礼競技その他 (1)

(黄海, 平安, 咸鏡地方) が豊年になり, 東軍が負ければ, 三南地方 (忠清, 慶尚, 全羅地方) が豊年になるとの俗信があった。そのため, 毎年, 何人かが死ぬ騒ぎになった (10頁)。朝鮮でも, 石合戦は年占として行われたことが分かる。イランの新石器時代の住居跡から, 直径3センチほどの粘土製のピンポン玉のような塊が, 1か所に10個, 20個と多数がまとまって発見される。日本の弥生式遺跡から出土する, 弾丸と呼ばれる土の塊と同じものである。野獣や野鳥は, このような土の弾丸で仕とめたのかどうか, 疑問である。弓矢や罠で仕とめる方が, より安全, 確実である。これらの土の弾丸は, 儀礼用のもので, 各家で保存し, 必要なときに石合戦に用いたのであろう。

エジプトのペルセウス神殿では, 競技の勝者への賞品が, 家畜や毛皮の外衣や獣皮であったことは, すでに述べた (ヘロドトス, 2・91)。競技の賞品は, 地域によって異なっていた。エレウシスの競技では, 勝者には大麦が賞として与えられた。エレウシスの祭神であるデメテルとペルセポネは, エレウシスの始祖王エレウシス王の孫であるトリプトレモス王に大麦を与え, 世界に広めるように命じた。天孫が穀物の種をもって, 地上に降りてくる神話の変異形の1つであるが, 競技の勝者は, このような背景のある始原の食物を手に入れたのである。それは, 始原に戻って再生することを意味した。ギリシアでは, 競技の勝者の被る冠は, パセリやセロリのような香草でつくられたことは前述した。そのほか, 勝利者の冠はナツメヤシの葉でつくられた。ナツメヤシの木は, いちばん美しくて大きい木であるが, シリアやエジプトのナツメヤシのような, 甘い実をつけない。バビロニア人は, この木の利用法は, 360通りあるとあって頌えているけれど, ギリシア人には何の役にも立たない木である。しかし, ナツメヤシの木は, 植物の中で長寿のものである (『プルターク『倫理論集』の話』291—294頁)。ナツメヤシの実やイチジクの実は, 乾燥して食糧として保存する。麦が主食とされる以前は, これらのものが, 主食とされた。現在は, 移動する遊牧民は, 移動の途中で接触した農村で, 羊その他の物品を小麦粉と交換し, パンを焼いて, 乳製品と共にナツメヤシの乾果を食べる。パンが払底しても, ナツメヤシの実と乳製品と

(間引き用の子羊の肉と)茶があれば、生命を維持できる。江上波夫は、羊などの家畜を、歩く缶詰と表現したが、遊牧民は、ナツメヤシの実らない地域でも、それに代わるものがあれば、生きてゆけた。ギリシアの勝者の冠は、ナツメヤシの葉でつくった。それは、始原の食物としてのその実の豊穰性を象徴するものであった。ギリシアの風土では、ナツメヤシは、美しい木ではあっても、十分に実を結ばなかったが、この木がもつ豊穰性の伝統はあったと考えられる。

アキレウスは、親友パトロクロスの葬儀にさいしての葬礼競技の賞品を、船から運ばせた。それは、釜、3脚のかなえ、馬やラバや牛、美しい帯をした女、灰色の鋼鉄のものなどから成っていた。戦車競走に加わる者には、手工芸に長じた女を提供した。1等賞には、耳型の飾りのついたかなえ、2等賞には、ラバの子を娠った6歳駒、3等賞には、火にかけたことのない釜、4等賞には、2本の金の延棒、5等賞には、把手の2つついた手鍋を当てた。賞品は、競技ごとに種類のちがったものが出され、2人で争う相撲のような競技でも、敗者にも賞が出された(ホメロス『イーリアス』第23巻)。ホメロス時代、競技の賞は一般化され、原初の意味をとどめていないように見える。参加者が、手工芸に秀でた女を手に入れた。機織りばかりでなく、農作業や家事にも優れた技能をもつ女が尊重された。後年、夫の未帰還中、機織りをしつつ求婚者を却けたペネロペも、競技の勝者への賞として、オデッセウスに与えられたものであった。賞としての女は、豊穰性の象徴であった。かなえは、3本脚の間で火を焚く神祭用の大釜で、豊穰性を象徴した。釜や鍋も、食物と関係があり、墓の内部には大釜が据えてあり、死者の再生にも不可欠な道具であった。ラバは1代雑種で、繁殖力がないので、豊穰性があるとはいえないが、2等賞に挙げられ、大釜や2本の金の延棒より上位に見なされた。葬礼競技の賞として、雄ロバによって娠らせられた雌馬が提供された。この限りでは、豊穰性を表わすが、ラバには豊穰性がない。ラバは繁殖しないが、異種間の産物としての意味をもっていたにちがいない。それは、人間と祖先獣との交合により、死者が再生する論理と重なり合うのであろう。

## 葬礼競技その他 (1)

ボルネオ島のカヤン族が、播種時に競技をすることは前述した。ニューギニア島のカイ族は、タロイモとヤムイモの成長を促すために競技をする。収穫後に競技をする習俗もある。ドイツでは、柱の先端に布をとりつけ、奪い合う。賞品にはハンケチが与えられる（フレイザー『穀物と野生動物の霊魂』I, 101, 76頁）。フレイザーは、これらの伝統的競技は、農作物の刈り入れを誰がいちばん早く終えるかを競うものであったとする。また、脱穀場で、誰がいちばん早く脱穀するかを競うものであった（前掲書, 74—75頁）。アフガニスタンの春分の日の新年に、柱の先端にとりつけた布を奪い合う行事がある。新年祭は、古くは収穫祭と重なったので、刈りとられて殺された穀霊の再生のための葬礼・再生競技であるといえる。柱の先から垂れ下がる布は、穀霊（蛇や猪、狼などの野性獣に化身した）を象徴していた。

三蔵法師玄奘が、カピラヴァスツ国を訪れたときは、国の多くの都城は荒廃していた。彼は、ある小さい塔のそばに、鏡のように清らかな泉を見た。そこは、昔、釈迦が釈種の人たちと角技をし、強弓を引いて技を競った所である。矢は弦を離れ、鉄鼓を突き通し、反対側を貫き、地上に落ちて、羽を没した。それが原因で清流が湧き出る（『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、1971年、198—199頁）。この説話は、訳注もいうように、『因果経』2、『仏本行集経』13その他に見えるものである。カピラ城の大臣の娘ヤショーダラー姫は、婿選びをする。釈迦は他の釈種の青年と、角技、跳擲、奔走などの競技をし、全てに勝つ。さらに、射技の競技では、先王の廟に祭る、誰も引くことのできない強弓をとり寄せ、鉄鼓を10拘廬舎の距離に置き、さらに7鉄猪、7鉄多羅樹を10拘廬舎の外に置いて射たところ、その全部を貫通し、矢は地に没して井をなした。時人はこれを箭井といったとある。拘廬舎というのは、梵語クローシャのことで、叫び声のとどく距離である。ヤショーダラーは、求婚者に競技させ、勝者を夫に選んだ。これは、スヴァヤンヴァラという婿選びの方法の1つで、自ら選ぶという意味をもっていた。釈迦伝のこの部分は、ヤショーダラー姫のスヴァヤンヴァラに重点が置かれている。競技が婚姻という再生儀礼の導入部になっているので当然であるが、もう1つ別

の面がある。それは、釈迦が射た矢が地上に落ちて、地を穿ち、そこから清い水が湧き出して、井泉となったことである。井泉は、生命の水を湧出する豊穡の象徴である。競技の勝者が、井泉を穿ち、生命の水を湧出させたのであった。他の文化では、雨乞いのために、競技が行われた。

淳和天皇の天長元年（824）の大旱に、釈守敏は、勅により請雨経を修し、善如（善女）竜王を呪して雨を得た。『今昔物語集』巻14、本朝第40の説話にいう。弘法大師は、修円僧都の呪力を封じるため、自分は死んだという噂を弘めさせ、修円が安心して、自分を殺そうとする呪法を満願にしたのを知ると、彼に呪いをかけて殺してしまう。これにつづく第41の説話にいう。

（淳和）天皇の御代に、天下に旱魃がつづき、万物が枯れ尽きた。天皇は弘法大師を召して、雨を降らすよう命じた。大師は、神泉苑で、請雨経の法を行った。すると、祭壇の上に5尺ほどの蛇が現れ、その上に、5寸ほどの金色の蛇をのせている。蛇は池の中に入っていった。この蛇は、天竺の池に住む善如竜王であった。その結果、西の空がにわか曇って、大雨が降り、旱魃は終わった（日本古典文学大系24『今昔物語集』3、岩波書店、1961年、332—335頁）。頭注によると、修円僧都は、守敏であるが、大師と守敏は混同されたとある（334頁）。東寺の弘法大師と西寺の守敏との関係は、釈迦と彼のいとこ提婆達多、ゾロアスター教の善神アフラ・マズダーと悪神アンラ・マンユ（アフレマン）の関係に等しく、善悪の競技・闘争によって、宇宙・生命の更新をはかったのである。釈迦は、競技によって、最後には、井泉を穿ち、旱魃から人民を救い、自らはヤショーダラー姫を手に入れた。弘法大師は、のちにつくられていった教敵守敏の業績をとり上げ、請雨の成功者となり、農業の救済者となった。

農業が栄えるためには、それを促進する競技が先立った。それは農業にとどまらず、漁撈や狩猟においても同じであった。昔、倭武天皇が、東方を巡察したとき、多くの鹿のいる野と、あわびや魚の多い海についた。天皇と橘皇后は、山と海の獲物のさちを競って探した。野の狩りは、一日中射て回ったが、獣1匹とれなかった。海の漁は、ほんのわずかの間に、多くの獲物が



## 葬礼競技その他 (1)

あった。天皇は、今日は、朕と皇后が野と海に行って、祥福<sup>さちち</sup>を争った。野の獲物はとれなかったが、海の食べ物は食い飽きたといった（『常陸国風土記』多珂郡）。さちというのは、古語辞典によると、矢をさしたという。さち争いは、射技競べがもとにあって、それによる獲物の多寡の意となったのであろう。山と海のさちの豊穰が、季節の儀礼として天皇と皇后によっても祈願されたことがわかる。

天皇の発生の始まりの、海幸・山幸の神話にも、さち争いのモチーフが見られる。『古事記』と『日本書紀』の伝える所では、次のようになっている。天孫ニギノミコトとコノハナサクヤヒメとの間にできた2人兄弟のうち、兄の海幸彦は海の漁を得意とし、弟の山幸彦は山の猟を得意とした。あるとき、兄弟は猟（漁）具を交換して漁猟に出かけたが、お互い、何の獲物もなかった。あまつさえ、弟の山幸彦は、兄の所有する、霊力のこもった針を魚にとられてしまうはめとなった。山幸彦は、<sup>しおつちのおきな</sup>塩土老翁の助言を得て、海神宮に至り、海神の娘豊玉姫と婚する。3年後、山幸彦は、失った針を鯛ののどからとり出し、地上に帰還する。豊玉姫は、山幸彦のあとを追って地上に達するが、海岸で産気づいて、ウガヤフキアエズノミコトを生む。山幸彦は、兄の海幸彦に針を返し、海神からもらった<sup>しおみつたま</sup>塩満玉と<sup>しおひるたま</sup>塩乾玉を使って兄を溺れさせ、恭順させる。豊玉姫は、出産している姿をのぞき見されたので、海神宮に帰り、妹の玉依姫を送って赤子を養育させた。ウガヤフキアエズノミコトは、長じて叔母の玉依姫と婚して、のちの神武天皇を設ける。兄の海幸彦は、その後、昼夜弟を守護し、たふさきをつけ、顔と手を赤く塗り、溺れるさまを演じて、弟の山幸彦に仕えた。その子孫が隼人であるという。日本神話に見る兄弟神のさち争いは、天皇家の始祖に関わるものであった。天皇の豊穰性を表わすために、さち争いを行ったのである。天から地上に降りてきた、天照大神の孫ニギノミコトは、地上における孫である神武天皇の中に自らを反映する。それは、異界の霊の再生であるが、さち争いは、再生に先んじて行われた葬礼競技の変種といえるものであった。

(つづく)